

	ニホンイトヨ Gasterosteus nipponicus 				
種名					
分類	トゲウオ目トゲウオ科	俗称	ハリウオ(全国)	生活型	遊泳性、溯河回遊魚
分布	降海型は、日本海側で山口県を西限、太平洋側で利根川を南限とする本州各地と、北海道の海岸に近い平野部の河川、池沼に分布する。国外では北半球の亜寒帯から温帯にかけて広く分布する。				
形態	全長約 60～100 mm。背鰭の前方の3(～4)棘は互いに遊離している。鱗はないが、体側に 18～37 枚の鱗板が存在する。尾柄部は細い。体色は緑褐色で、背部は暗青色を帯び、腹部は銀白色に輝く。産卵期には雌雄ともに顕著な婚姻色を現す。				
類似種	日本産のトゲウオ類は、イトヨ類とトミヨ類に大別される。トミヨ類は背鰭の棘が7～13 棘と多く、容易にイトヨ類と区別される。イトヨ類には、本種のほかにハリヨがいるが、鱗板の数が4～8枚でイトヨ類に比べて少ないことで区別できる。イトヨの陸封型は降海型に比べて体高が高く、小型で、背鰭の鰭膜が棘の先端まで達する。				
生息場所	成魚は2月下旬頃から河川に溯上し始め、中流域から下流域の小川や用水路などの、水草のあるところにすみつき、4～6月頃に巣を作って産卵する。 仔魚期は巣の中で過ごす。体長 20 mm位から巣を離れ、30 mm前後になる夏から秋にかけて海に下る。沿岸や潮溜まりで生息し、翌年成魚になって溯上する。				
食性	ア肉食性で、水生昆虫、小型甲殻類を餌にしている。魚卵、仔魚なども食べる。				
繁殖	産卵期: 4月上旬～6月下旬。産卵場所: 小川や用水路の流れの緩やかな砂泥底。産卵床: 雄が作った巣の中。卵: 球形で直径 1.2～1.7 mm。粘液により凝集する。 産卵数: 1回に 30～150 粒を産卵する。孵化日数: 水温 18～19℃では、192 時間前後で孵化する。二次性徴: 雄は胸鰭が長い。背鰭の棘も雄でよく発達する。 婚姻色: 雄では眼が青く、背側が青みを増し、喉から腹部にかけて鮮紅色となる。雌は喉に桃色の斑紋ができ、産卵直前には体が銀色の金属光沢を帯びる。 産卵行動: 雄はまず縄張りを確保し、砂泥底に直径約4～6cm、深さ1～2cm程度のくぼみを作る。水草や藻類の繊維を集め、腎臓から出る粘着成分でこれらを固め、上から砂泥をかける。中央にトンネルを掘り、6時間～2日位で8～10 cmの巣が完成する。腹の膨れた雌が縄張り内に来ると、雄はジグザグダンスをして求愛する。数回のダンスの後、雄は雌を巣に導き、巣に入った雌の尾鰭の付け根をつつく。この刺激で雌が放卵して、反対側から外に出る。雄が巣の入り口から入り、放精する。雄は2～3尾の雌を巣に導き、数百粒の卵が巣につく(宮地ほか、1976)。卵保護行動: 雄は卵を保護し、孵化時まで胸鰭を用いて巣の中に新鮮な水を送り込む。孵化後は、巣外に出た仔魚を口内に入れて巣内に連れ戻す。縄張り防衛行動はこの時期に最も強くなる。				
配慮のポイント	○河川の中流域から下流域にある小川や用水路から海までの移動が容易であることと、産卵環境の保全が大切である。 ○河川改修に際しては、横断工作物の設置の仕方や、本流と支流や細流との連続性の維持について、十分に配慮する必要がある。 ○産卵環境としての小川や用水路を維持し、河岸や河床のコンクリート化や下水の流入を防止する。 ○水生植物の保護や水質保全に努める。				
トピックス	○漁法: かつて新潟県では溯上期にイトヨ漁が行われ、阿賀野川では専用の刺網もあった。				
引用文献: 『川の生物図典』を改変					